

史談

2009 (H21) 2・15

■ さいと焼き

「正月三が日は大荒れ」といった天気予報は見事にはずれた。それぞれに資格を持っている人たちが出す予報なのだが、あまりあてにはならない。もっともこれも好天だったから笑っておれるが、逆だったら苦情が殺到するだろう。

今年のさいと焼きは11日だったが、この日の天気予報もはずれた。そのおかげで「やははえろ作り」は寒くもなくて助かった。驚いたのはその夜のお月さまだった。盛んに燃えるさいと焼きの空に月が出ていたという記憶はないが、以前は旧暦の15日の夜だったろうから、晴れてさえいればいつも「お月夜のさいと焼き」だったのかもしれない。

正月や今宵十六夜「やははえろ」

■ 「馬鳴山・西明寺」のこと

この正月の町内のさいと焼きの時に近くの町田さんが「こんな時でない」といって、2枚の大きな木のお札を持ってきた。近くにいたので見せてもらったら、梵字の下に「転読大般若経」と「家内安全 蚕養安全」の文字が読めた。両脇すみには「馬鳴山 西明寺」ともある。そこで「燃やすことなど、いつでもできる・・・」と言って持ち帰ってもらった。



後日、改めて見せてもらい寸法を測ったら高さは70センチ余りある。ただ、いつごろのものか、なぜ個人の家これほどのものがあるのか、この寺はどこにあったのか、何の梵字か、などの疑問が次々と起きてきた。

真言系の寺を中心にあちこちで行われていた「お大般若」も、最近はずらしくなってきた。終わった後の木のお札は村に疫病が入って来ないようにと、村境に杭を立てて打ち付けられたものを今も見ることがある。

町田さんの家は旧家で、かつて蚕種業を営んでいたということは聞いて知っていたが、個人の家で「お大般若」をやるにはそれ相当のお金もかかったはずである。

ともあれ、思い立って米沢の遠山にある「西明寺」を訪ねた。ここは置賜三十三観音の札所にもなっている。応対してくださった住職の戸田大僧正から、この寺は「恵日山」であり山号が違うことや、梵字は般若菩薩で「ジニヤ」であること、すでに廃寺になった真言系の寺に手がかりはないか、などの教示を得た。

寺の境内からは真っ白な蔵王の山並みと米沢の町が見渡せる。直江兼続が詠んだ漢詩を刻んだ石碑もあり、時節柄、訪れる人も多いらしい。さて「馬鳴山・西明寺」はどこにあったのだろうか。今のところ『白鷹町史』や『長井市史』を見ても出てこないが、明治の神仏分離なども視野に入れる必要があるようである。会員諸氏の力をお借りしたいものである。(川)

■ 古来、「勝てば官軍」のたとえあり・・・

古来、「勝てば官軍」のたとえあり。すなわち、一夜明ければ「幕府のやることなど、前から気に入らぬものばかりだった」とあれこれ並べ立てるありさま、じつに見苦しきものなり。半年ほど前まではおくびにも出さなかったことをいう者の変わりよう、まさに「手のひらを返したような・・・」というよりほかになし。

狐や狸に化かされたわけでもあるまいに、肥溜めに落ちてからやっと思がさめたような口

ぶりは、この上なく奇態なものなり。いずれにせよ争いごとに勝ち負けはつきものなれど、昔から「負けるが勝ち」、「勝って兜の緒を締めよ」、「おごれるものも久しからず」などの、先人の考えた俚諺あり。更にとかく人の心は移ろいやすく、当てにならぬものであることをくれぐれも忘れるべからず。(川)

■ 掛け出しの頃 — 「古文書解説」

思えば二十数年前のことになる。宮内に勤務していた頃、長井市平野のご出身だと聞いて、面識はなかったが元宮内小学校長の今野竹蔵先生を尋ねた。先生は明治生まれ、退職されてから南陽市史編纂委員を勤められた人である。生家に残った三枚の古文書を見て貰いたいと思ったからである。「こういうものは四、五日借りて、じっくり眺めて見ないと読めないものだ」と言われたことを今も覚えている。これがこの道に入るきっかけとなった。しかし本格的に学ぼうと通信教育を受け始めたのは、その後十年も経ってからで今となると、その時すぐに取り組みばよかったと悔やまれる。

多少読めるようになったと思われる頃に、当時町内でも話題になってきた『於新砥萬覚』の原本コピーを金田章先生からお借りして解説を試みた。読めないところは□にして残し、熱の冷めないうちに三六〇枚を終了した。間もなく町史資料として解説書が発行されたので、自分の解説したものを添削・校正してみた。終了日は平成九年四月五日と記してある。解説の頁が進むにつれて赤字が減ってくるのが嬉しかった。

今にして思えば無茶な試みであったが、これで多少自信をつけたので他の古文書を手に入れ、解説力の習得に励んだ。その中で仙台市史の資料編 10 伊達政宗文書 I (書簡集)の解説が印象に残っている。原本の写真と解説文が別になっていて実力養成にはもってこいのものだ。これで戦国時代の所謂武将文書の読み方を習得し、米沢古文書研究会にも楽しく通った。

それにしても我が町の先輩諸先生方は、古文

書研究の草分けとしてたいへんな努力をされたものだと思う。当時の学習環境から考えると頭が下がる思いである。最近、白鷹古文書会のメンバーが地元に残っている様々な文書を発見・提示されているが、これらを正しく読みながら次世代へ伝えて、町の歴史の理解に役立てる努力をしたいものだと思う。(佐藤與七)

■ ウルシかぶれ 4

そもそも「漆」の汁を取るためのウルシの木は山野に自生しておらず、みな人の手によって植栽され、管理されてきた。しかも届け出る必要があり、持ち主もはっきりしていたのである。たいていは畑や屋敷の隅などに植えられ、漆掻きをする職人が夏の間、定期的に漆掻きに回った。木によっても違うが、一本の木からひと夏で牛乳瓶一本ほど取れたという。

明治になって漆は国の統制からはずされたのでいっぺんに切られ、その後は製糸業の発達もあって桑に変わり、やがて食料増産のために米に変わった。その米も今度は余って減反になり、野菜や果樹へと転換をはかっている。

その結果、私たちのまわりからウルシの木が無くなったのだが、一方で植栽した人もいた。かつて伊佐沢の大石地区に約4千本植えた人がいたというし、今も西根の草岡地区には相当数のウルシの木が植えられている。しかしその手入れとなると、かならずしも良好とはいえず、荒れてカヤの野原になりつつある。

しかしこのままではもったいないが、致し方ない事情もある。第一に漆の需要はあっても中国産のものが安く入ってくる。一説には国内で使用される漆の総量の1パーセントが国産だという。質は格段にいいとしても価格で勝負にならないとか。山形鑄物に使われる漆も県内のものは使われていないという。さらには漆掻きをする人がいない。個人の体質もあるが、かぶれるせいだろうか。それよりも夏場のきつい仕事の割には、金にならないからだともいう。ただ、今後も漆の需要がまったく無くなることはないだろうと思うと、惜しい気もする。(川)

